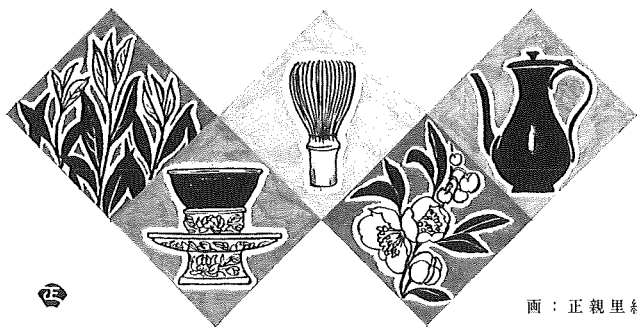


禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

第11回 鎌倉時代の禅林とお茶の話（中）

館 隆 志

鎌倉時代の禅僧たちが日本に導入した宋朝式の喫茶文化は、禅の布教においても、重要なものと考えられていたようです。もちろん、「喫茶去」などさまざまな公案（禅の課題）で、茶を用いたものがあるからということもあるでしょう。しかし、宋朝式の喫茶文化が日本においては最新の外国文化であったということも影響しているのかもしれませんが。

二〇一八年度の花園誌に「禅が伝えた道具の話」として、「禅房十事」という禅寺で大事な十の道具を紹介しましたが、同時代の中国の「禅房十事」と日本の「禅房十事」が同じではないのです。

特に、日本のものには「浄瓶」と「茶盞」という茶に関連する道具が二つも入っているのです。中国では喫茶文化は禅寺以外でも日常でしたが、日本ではそうではありませんでした。そのため、日本ではお茶に関する道具が禅寺における大事な道具として扱われたのではないのでしょうか。

鎌倉時代、お茶はどのように栽培され、そ

して禅寺はどのようにしてお茶を入手していたのでしようか。南北朝期の『異制庭訓往来』「三月復状」には、

我が朝の「産茶の」名山は、梅尾を以て第一と為す。仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺を、是れ輔佐と為す。此の外、大和室尾、伊賀八島、伊勢八島、駿河清見、武蔵河越の茶、皆な是れ天下の指して言う所なり。

とあって、梅尾茶を第一とする茶の名産地が記されています。ただし、ここに挙げられたのは、あくまで名産地であり、他の多くの場所でも茶が栽培されていたはずで、そうでなければ、膨大な禅僧の消費量をまかなえるはずがないからです。

この点、少なくともお茶を必要とする禅寺の境内、あるいはその周辺では茶が栽培されていたことが数々の史料から解ります。たとえば、臨済宗の円爾禅師の法嗣である白雲慧暁禅師の『仏照禅師語録』には「普請（共同作業）して茶を種う」という偈頌が収録され

ていて、修行僧が総出で茶（の苗木）を植えているのです。

また、南禅寺の二世となった規庵祖円禅師の『南院国師語録』には「和移茶韻四首（茶を移すの韻に和す四首）」という偈頌が収録されていて、「壑源」（福建省建溪）の茶の「種」を境内やその周辺に植えていることが記されています。当時の中国の最高級の茶種が、南禅寺やその周辺に植えられていたことになるのです。このように、鎌倉時代には多くの禅寺で同じように境内やその周辺で茶を栽培していたものと思われず。

一方、『異制庭訓往来』に記された名産地として臨済宗寺院は駿河の清見寺だけです。ほかの名産地が禅寺やその周辺ではないので、この時代の茶の栽培は禅寺以外の顕密寺院が中心であったと考える説もあります。しかし、私はそうは思いません。禅寺で栽培される大量の茶は自分たちの修行生活で消費するものですので、鎌倉時代における一般の流通にのるものではなかったものと思われず。禅寺

では常に不足していたとしても不思議ではないのです。

名産地として名前が記録されるということは、一方で、それが多く生産されているというだけではなく、その場所における茶の使用量に対して、茶の生産量が勝っていたからに他ならないのではないのでしょうか。私は、各禅寺でこの時代、大量に茶が生産されていたと考えています。それらの茶は、あるいは禅寺の間でやりとりされていたのかもしれない。そのぐらい、当時の禅寺では茶は大切なものだったのです。

たとえば、鎌倉末期にかけて活躍した臨済宗の孤峰覚明禅師が、曹洞宗の瑩山紹瑾禅師を能登の永光寺に訪ねていますが、「茶樹の自然に生えるを見」て、これを永光寺の靈妙なこととして取り上げています（『洞谷記』元亨三年六月二十三日条）。茶樹が自然に生えているだけで、禅寺として靈妙だったのです。那須の雲巖寺を開いた高峰顕日禅師は、後嵯峨天皇の皇子だった方です。この高峰禅師

の語録『仏国国師語録』『東山雲巖寺語録』には、「摘茶上堂（茶摘みの折の説法）」が収録されています。那須雲巖寺の周辺で茶が栽培され、修行僧は住持とともに茶を摘んでいたでしょう。

さて、お茶は全国で栽培されていますが、「経済的流通のある栽培地」というと、気候が茶の栽培に適している場所になるだろうと思います。あまり寒いと茶が育ちません。このうち、「経済的流通のある栽培地」の北限の一つが栃木県大田原市（旧黒羽町）で、現在も茶栽培が行われています。そして、雲巖寺はこの大田原市（旧黒羽町）にあるのです。高峰禅師は、七百年前に「経済的流通のある栽培地」の北限で茶を栽培していたのです。

館 隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師・花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。